



## 研修講座 B-14 「食物アレルギーに関する研修会」を実施しました！

## 「学校生活におけるアレルギー疾患の管理」

【講師】国立病院機構 三重病院小児科医師 長尾 みづほさん

2月2日(月)、「食物アレルギーに関する研修会」の研修講座を実施しました。

冒頭、長尾先生から「学校がアレルギー症状の初発となる可能性がある」というお話がありました。現在伊賀市では、給食で除去食を実施している子どもが83名、エピペンを携帯する子どもは17名います。長尾先生のお話からも、今後増えていく可能性も考えられます。だからこそ、子どもたちに関わる私たち教職員が、学校管理指導表に基づいて子どもの状況を把握し、食物アレルギー疾患について正しい知識をもち、迅速・適切に対応するための校内体制の確認・確立が必要であることを改めて感じました。

特に意識したいことは、アナフィラキシーショック時の対応です。20%は皮膚症状が無い場合があるそうです。そこで躊躇し、エピペンを打つのが遅れると、気道閉塞等をもたらす、命に関わることもあります。また学校が初発となりアレルギー反応が起こった場合には、救急車を呼ぶことというお話もありました。そしてそれまでの対応として、具合が悪く横たわっている時に体を起こそうとすると、血圧の変動をもたらす、エピペンの効き目がなくなるという事例を聞かせていただきました。良かれと思って行った体位変換が、子どもの命を危険にさらすことになるかもしれません。

「ヒヤリハット事例」を校内研修で活用したり、エピペンの使い方を本人・保護者・園・学校で情報共有したりする重要性をお話いただきました。

研修に参加された先生方には、これからも子どもたちにとって安心・安全な給食の時間となるよう、校内で還流していただきたいと思えます。



## アンケートより【一部抜粋】

・毎年参加させてもらっているが、その度に正しい知識を学び直すことができ、とても大切な研修の場であると感じている。また新たな情報などを教えていただくことができ、とても勉強になった。改めて子どもの命を預かる責任ある立場であることを再認識できた。今回の研修での学びを職場の全職員に共有し、園全体で適切な対応が行えるようにしっかり連携を図っていきたい。【幼】

・アレルギー症状が出た時に、急激な体位変換で症状が悪化してしまうということを聞かせていただいて、対応の仕方をもっと勉強していきたいと思いました。またアレルギーがないとされている子どもでも、突然発症することがあると教えていただいたので、アレルギーのある子どもだけでなく、視野を広げる必要があると感じました。対応も複数で行うことの大切さを改めて実感しました。【小】

・来年度、本校には6人の除去食対応のお子さんが在籍することになります。担当任せにすることなく、しっかり校内体制を整えて安心・安全な学校づくりに努めます。本日の研修もしっかり還流させていただきます。【中】